



*Groovin' Magic*

その日、珍しくルリは一人で下校する事になった。

ユカは委員会でも下校が遅くなり、神代は用事があるからといって先に帰ってしまった。

(まあ、たまにはいいかな……)

最近では改善されてきているが、元々は人付き合いが苦手で、一人である事が別に苦にならない為、ルリは気楽に帰路へ着こうとしていた。

だからこそ、『それ』は完全に予想外の出来事であった。

「よ、青木。これから帰るところか？」  
校門を出たところでいきなり声をかけられ、ルリは思わずビクリと身を震わせながら、おずおずと声の方を向いた。

「あ、吉岡……」

声をかけてきたのは、同じクラスの男子、吉岡であった。

「そんなに驚かんでも……」

「あ、うん……ゴメン」

「いやまあ、いいけどな。それより、一人なのか？」

いつもルリと一緒にユカがいない事を不思議に思った吉岡が尋ねる。

「ユカ、今日は委員会だから……」

「へえ……じゃあ、一緒に帰らね？」

何気なく誘う吉岡だったが、ルリからすれば、衝撃の言葉だった。

「え……？ 吉岡と……一緒に？」

今まで男子と下校した事などないルリは目を泳がせ、どこか挙動不審になる。

「そんなに警戒しなくても、言ってみただけだよ」

そんなルリに吉岡は苦笑する。

「じゃあ、また明日な」

吉岡は片手を上げて辞去を告げ、ルリに背を向けようとした。

「あ、吉岡……」

ルリは思わず吉岡を引き止める。

「ん、どうした？」

「えつと……いいよ、一緒に帰ろ」

緊張した面持ちで、ルリは吉岡の隣に移動する。

『苦手が先行する所を、もう少し改善した方が良い』と普段からユカに言われている事もあって、まずは男子に対する苦手意識を減らす努力をしようと、ルリは吉岡からの誘いに乗る事にしたのであった。

（まあ、頭燃やしちゃったしね……）

角を触らせた事でお詫びは済んでいると思うが、それでも下校ぐらいは付き合っても良いのではないか、なんて事を考えながら、ルリは吉岡と並んで歩き始めた。

\*

帰り道で他愛のない話をしながら、ルリは不意に『吉岡は私の事をどう思っているのだろうか？』と疑問を抱いた。

火傷しなかったとは言っていたが、頭を燃やされたのだから、普通ならば怖がったり、避けたりするものではないだろうか？

しかし、吉岡は気にする素振りを見せないし、自分への接し方も特に変化は無い。相変わらず、一方的にだる絡みしてくる。

（吉岡って、結構変わり者？）

などと、些か失礼な事を考えつつ、隣を歩く吉岡をチラリと見つめる。

「ねえ、吉岡はさ……私の事、どう思ってるの？」

ルリは何気なく吉岡に問う。特に深い意味は無く、ドラゴンとしての能力が目覚める前と何ら変わらない吉岡が不思議だったので、何となく聞いてみただけであった。

「ど、どうって……」

だが、当の吉岡は何故か顔を赤くして、何かを言い淀んでいた。

「いきなり頭を燃やされたりしたら、普通は怖いとか思うモンじゃない？」

「まあ、確かにそうなのかもな……」

神妙な顔で言う吉岡であったが、ルリは何か釈然としない。

「でも、吉岡は今までと同じように話しかけてくるし、怖がるどころか私の事を心配してくれていたよね」

問いかけるような眼差しを向けるルリに、吉岡は気まぎれな顔つきで目を逸らす。

そして、ポツリと呟いた。

「そりやお前……火を吹こうが青木は青木だし……血を吐いたりしたら、心配するに決まってるだろ。それが好きな子なら、尚更だ……」

「お前って言うな……って、え？」

反射的に言葉を返すルリだったが、吉岡が言った事に、思いもよらないワードが含まれていたのに気付いた。気付いてしまった。

「今『好きな子』って……えっ!？」

想定外の言葉に立ち竦むルリ。

吉岡も「しまった……」と小さく呟き、気まぎれそうな表情で髪をガシガシと掻き篦ると、意を決したようにルリを見つめた。

「口が滑って言っちゃったけど……俺、青木の事が……好きだ。ずっと前から、好きだったんだ」

「え……ええっ!?! ちよちよちよ、ちよつと待って!」

吉岡の思いがけない告白に、ルリは何をどうすれば良いのか分からずに、目を白黒させる。

「わ、私……半分ドラゴンだよ？」  
「何とも間の抜けた返しであった。」

「関係ない。半分ドラゴンだろうと、それでも好きなんだ。だから……俺と付き合ってほしい」

そう言って、吉岡は真剣な眼差しでルリを見つめた。

突然の告白にパニックを起こしたルリは、目を泳がせながらも何かを言おうとするが、言葉にならない。

「あの……私……その……バ、バス来たから、それじゃ！」

状況に耐えられなくなったルリは、バス停に向かってダッシュすると、折よく停車していたバスに飛び込み、その場から逃げ出した。

(やっちまった……)

思わず告白してしまった事を後悔しつつ、文字通り逃げ去っていったルリを、吉岡は黙って見守る事しか出来なかった。

\*

帰宅後、自室でルリは吉岡からの告白を思い返し、ベッドの上で一人煩悶していた。

(吉岡って、私の事が好きだから、いつも絡んできてたのか……)

得心がいったルリだったが、そうなるに恥ずかしさがこみ上げてきて、真っ赤になって枕に顔を埋める。

(だからって、あんな風にいきなり告らなくても……)

ますます恥ずかしさが増していき、枕に顔を埋めたまま、足をバタバタさせる。